

経典について

中央仏教学院講師 小田 義久



釈尊は「自らを灯とし、法を灯とし、他を灯とするなかれ。自らに帰依し、法に帰依し、他に帰依するなかれ」と説かれ、法を教団の拠り所とすることを示して入滅されました。

しかし、釈尊の入滅直後、仏教教団の統制を乱すような言行をなすものも出現しましたので、第一結集が行われました。これは、マガダ国王舎城外の七葉窟に500人の比丘が集って行われました。摩訶迦葉が中心となり、持戒第一といわれた優波離が戒律について、その条文とそれが誰のためにどういう因縁で制定されたものか暗誦しました。また、多聞第一といわれた阿難は教説について暗誦し、教法について述べました。そして、そのたびごとに全員で確認し合誦することにより、釈尊の教法と戒律が、「仏説」として確定されたのであります。

その後、教団はインドの各地方へと発展し、これにともなって教法や戒律について保守的な考え方を持つグループや、これらの固定化に反対する進歩的なグループなどが現れるようになりました。

仏滅後100年頃になりますと、主として戒律の問題をめぐって700人の比丘がヴァイシャリーに集って、第二結集が行われました。そしてこれを機に、仏教教団は大衆部と上座部に分裂（根本分裂）しましたが、さらに分派（枝末分裂）が発生することにより、部派仏教の時代へと推移するのであります。

インドでは、前317年頃にマウリヤ王朝が成立しました。前268年頃ビンドゥサーラ王のあとを継いで即位されたアショーカ王は、カリンガ地方の征服を機に、仏教に帰依されました。そして、仏典結集（第3回）を援助したり、インド各地に多数の石柱碑や仏塔を建立し、自分の理想とするダルマ（法）による政治に努められました。

なかでも法の宣布のために、国の内外に伝道師を派遣されたことは、仏教がインド国内の一宗教に止どまることなく、世界の宗教へと飛躍する糸口となりました。王は王子のマヒンダをセイロン（スリランカ）に派遣されました。このことは、仏教が東南アジア方面へ発展し、南伝仏教が成立する要因となりました。またマジヤンティカ（末田地）を、西北インドのガンダーラ地方に派遣されました。このことは、北伝仏教の発展に大きな

影響を与えました。

インドで興起した仏教は、西域（オアシスの道）を經由して、紀元前後には中国に伝来しました。このことを、仏教東漸という場合もあります。仏教東漸の道は、オアシス都市でつながっていますが、西域北道ではクチャ（亀茲）、西域南道ではコートン（于闐）が最大のオアシス都市でありました。これらの道を經由して洛陽や長安に来朝した仏教徒は、持参した貝葉經典や、暗記してきた經典を口授することにより、仏教を中国に伝えました。しかし、桓帝の初めごろ来朝した大月氏国出身の支婁迦讖と安息国出身の安世高の二人によって、初めて大小両乗の經典が漢訳されました。

このことにより、中国人は自分たちの言葉で仏教を理解することが、初めて可能となりました。經典の翻訳は、表音文字で語尾変化のある胡語や梵語を、一字が独立した意味を持つ表意文字の漢語に翻訳するわけですので、大変困難な作業でありました。東晋時代の道安(312～385)は翻訳上の困難について、五つの食い違いと三種の困難があることを指摘しています。

中国では、經典の翻訳を中心とした伝訳時代を経て、401年頃から研究時代に入りますが、南朝梁の慧皎(497～554)は『高僧伝』(14巻)を編集しました。これは、漢代から梁代にかけて活躍した500人あまりの高僧を、訳経、義解、神異、習禪、明律、亡身、誦経、興福、経師、唱導の十科に分けてその事跡を記録したものです。

訳経については、すべての人びとにみ仏のみ教えを伝え、迷いの人生から抜け出す方策を示さずにはおかないという、不屈の意思と情熱をもって、翻訳がなされたと述べています。また、九番目の経師のところでは、お経を微妙な音声で朗詠し、聴衆に法悦を感じさせ味わわせた高僧11人について記述しています。そして、お経を読む場合には、清妙なる音律と端正なる読解が重要であると述べています。

「蓮如上人は、『おつとめの節も十分に知らないで、自分では正しくおつとめをしていると思っているものがある』と、おつとめの節回しが悪いことを指摘して、慶聞坊をいつもお叱りなっていたそうです」〔『蓮如上人御一代記聞書（現代語版）』62頁〕ということであります。

スクーリング会場で、おつとめの実演テストのある日は、真剣に練習に打ち込んでおられる教育生の姿を常に拝見いたします。そこでお聞きすると、やはり節回しが一番むずかしいと同音にいられます。おつとめに限らず、伝道や各学科のテストについても、おつとめの実演テスト同様、真剣に努力されますよう期待しております。

（龍谷大学名誉教授：仏教史担当）